

書評 潮の満ち引き

『Changing Tides: Vanishing Voices of Nikkei Fishermen and Their Families 「潮の満ち引き：日系漁民と家族の消えゆく声」』（タナカ・ジム、ハヤシ・コウタロウ、カンノ・フミオ、タナカ・ヘンリー著、ハーバー・パブリッシング、2017年）

2026年5月3日

大木 崇

1. 序文の要約

序文によると、「日系漁師の再会プロジェクト」は、日本の貧しい村を離れ、カナダでより良い生活を築こうとした移民世代を称えるため、日系カナダ人漁師の子孫たちによる取り組みとして2001年に始まった。このプロジェクトは、感謝を込めた夕食会の開催、スティーブストンへの記念碑の建立、そして日系カナダ人漁師とその家族に関する包括的な口述・写真史の出版を目的としていた。晩餐会は2001年に開催され、記念碑は2002年に除幕され、歴史書の第1巻は2007年に出版された。本書はこの歴史的記録を完結させるものであり、日系カナダ人の遺産に対する一般の理解を深める上で、口述歴史がいかに重要であることを強調している。序文によれば、個人の物語は、より広範な歴史的叙述を補完する、生きた体験への洞察を与えてくれる。

序文では、本書に収録された物語の多様な起源について述べられている。日本語で語られ、録音された後に翻訳されたもの、英語でのインタビューを通じて収集されたもの、あるいは両言語のいずれかで本人によって直接書かれたものなどがある。これらの物語は第二次世界大戦前から現在に至る時期を網羅しており、苦難、差別、忍耐、受容、および達成といった幅広い感情や経験を反映している。編集者らは、意図しない誤りが含まれている可能性を認めつつも、各物語は語り手が記憶している通りに提示されていることを強調している。

編集者らは、本書の構成は収集された物語の性質によって形作られたと説明している。文脈を明確にするため、本書は「戦前」「強制収容期」「再定住」「造船業者」「戦後」「ミフリン計画以降」という6つのテーマ別セクションに分かれている。各セクションには、簡潔な歴史的序文と、技術的・言語的な事項に関する短い解説が収録されている。こうした背景情報は、個人の語りそのものに焦点を当て続けるため、意図的に簡潔にまとめられている。

序文では、一世および二世の世代が残した遺産についても考察されている。差別的な法律や戦時中の強制収容に直面した彼らの忍耐は、困難ではあったがカナダの歴史において不可欠な一部であると述べられている。後の世代は戦後に開かれた機会の恩恵を受けたが、編集者は、そうした機会を

可能にした彼らの犠牲に対して感謝の意を表明している。序文では、寄稿者の中にはすでに他界した方もいるが、まだ語られていない物語は数多く残されており、編集者たちは本書が他の人々にも自身の記憶を記録するきっかけとなることを願っていると記されている。編集者たちは、初期の移民のほとんどがかつて望んだような物質的な成功を収めることはできなかったものの、日系漁師の子孫たちが自らのルーツをより深く理解し、先人たちの功績に誇りを感じるようになるだろうと信じている。序文は、初期の移民たちの開拓者精神と貢献に対する変わらぬ感謝の言葉を述べて締めくくられている。

2. 目次

本書の内容は、漁師とその家族による個人的な物語で構成されており、以下のカテゴリーに分類されている：

1. 戦前
2. 強制収容
3. 再定住
4. 造船業者
5. 戦後時代
6. ミフリン計画以降

以下は、漁師とその家族が語った物語の要約である。

2.1 マドコロ・トーマス、「トフィーノの良き昔」 2012年10月17日および11月21日インタビュー

マドコロ・トーマスは、1920年のスティーブストンでの誕生から、幼少期に家族がトフィーノへ移住したことまで、自身の幼少期を振り返っている。彼は英語と日本語の両方の学校に通いながら育ち、数人の年上の少女から時折人種差別的な悪口を言われることはあったものの、概して地元の子供たちと仲良く過ごしていた。学校での最も強い記憶は、ほぼ毎日体罰を受けていたことであり、それは後に、英語教師の厳格な指導スタイルの一部であったと理解するようになった。それにもかかわらず、戦後彼女と再会した際、彼は彼女に対して恨みなど抱いていなかった。7歳の時、父が突然亡くなり、彼の子供時代は劇的に変わった。兄のマドコロ・ジョニーは学校を辞めて父の漁船を引き継ぎ、叔父のマドコロ・リンシロの指導のもと、一家の主な稼ぎ手となった。母親もまた、

幼い子供たちを育てながら、海に出ている**マドコロ・ジョニー**の安全と成功を案じるという重い責任を背負った。1930 年、**マドコロ・トーマス**と母、そして妹の**マドコロ・クニコ**は、バンクーバーで「スクールボーイ」と「スクールガール」として働いていた姉の**マドコロ・ヤエコ**と**マドコロ・ミチ**のもとへ移り住んだ。母親はエビの皮むき作業の仕事を見つけ、路面電車の運賃を払う代わりに缶詰工場まで長い距離を歩いて通い、お金を節約した。その犠牲的な姿勢は、**マドコロ・トーマス**に深い感銘を与えた。彼はモデル・スクールとフェアビュー・ジャパニーズ・スクールに通ったが、学業面でも規律面でも苦戦し続けた。夏の間は、親戚と共にスキナ川で甲板員として働き、早い時期から漁業の世界に触れることになった。

16 歳になると、**マドコロ・トーマス**はトフィーノに戻り、日本人漁師協同組合で魚の積み込みや保冷作業に従事した。また、ポート・アルバーニ近郊のグリーン・コーブで、数シーズンにわたりサケの卵の塩漬け作業にも携わった。1939 年、叔父の**マドコロ・リンシロ**が日本へ引退し、28 フィートの船と協同組合の持分を彼に譲ったことで、彼の人生は一変した。**マドコロ・トーマス**は兄と共に、意気揚々と漁場へと繰り出した。彼は当時のトローリングの技術的詳細について、竿の配置や、重い鉛のオモリ、イワシを使った餌付け技法などを語っている。**マドコロ・トーマス**は、トフィーノ周辺の海域で一年中漁を行っていた。白人漁師との関係は概ね平和的だったが、差別的な漁業規制により、日本人漁師は主要河川での漁が禁止されていたのに対し、白人漁師にはそのような制限はなかった。また、日本人トロール漁師は、トロール漁の際、2 人以上を乗船させることも禁じられていた。**マドコロ・トーマス**は、この規則が彼らの収入を圧迫することを意図したものであると信じていた。彼は子供の頃、漁業監視官に見つからないよう船室に隠れなければならなかったが、これは日本人漁師が直面していた絶え間ない監視と不平等な扱いを如実に物語っている。

こうした制約にもかかわらず、1930 年代後半から 1940 年代前半にかけて、特に戦時中のサケ需要の高まりにより、漁業は繁栄した。トフィーノの日本人トロローラーたちは独自の協同組合を結成し、シアトルへ直接販売することで、より高い価格を確保した。**マドコロ・トーマス**は、良い日には自分の小型トロール船を数百ポンドの春鮭で満たすことができたと回想している。2 年目には、**マドコロ・ジョニー**が新造船を注文した際、彼の所有するより大型の 35 フィートの船を引き継いだ。1941 年までに協同組合の組合員たちは高収入を得ていたが、この安定した時期は真珠湾攻撃によって突然終わりを告げた。メディアや政治家の扇動により、反日感情が激しく高まった。攻撃から約 1 週間後、嵐のため**マドコロ・トーマス**らは船の状態を確認しに行ったが、脱出を図っているのではないかと疑った武装した海軍将校たちに立ち塞がれた。

状況は急速に悪化した。トフィーノ在住の日本人に対し退去命令が下った際、栈橋に別れを告げに来たのはたった一人だけで、町の人々の大半はダンスホールに集まっていた。この無関心は**マドコロ・トーマス**に深い傷を与え、地域社会がもはや彼らを受け入れていないことを確信させた。強制退去は、一世や年配の二世の家族にとって特に辛いものだった。持ち出しはスーツケース一つに限られ、家も船も生計の手段も一瞬にして失った。バンクーバーに到着すると、彼らはヘイスティングス・パークへ移送され、かつて家畜用に使われていた悪臭漂う納屋に収容された。屈辱的な環境にもかかわらず、彼らは政府の決定を待つ間、その場所を何とか住みやすいようにしようと努めた。間もなく、トフィーノの住民たちが彼らの帰還を望んでいないという知らせが届いた。ブリティッシュコロンビア州内陸部の収容所へ送られると知った時、**マドコロ・トーマス**は 1942 年に漁業に戻ることはない悟った。船や資産を没収された彼は、戦後の生活を再建するにはゼロからのスタートが必要だと理解した。彼の証言こそが、わずか数日のうちにコミュニティ、生計、そして帰属意識を失ったという感情的な重みを伝えている。

2.2 タナカ・ロイ、「漁業経営者の重要な役割」、2010 年インタビュー

タナカ・ロイは、1942 年の日系カナダ人の強制移送以前に、子供の頃の夏を過ごした場所であるスキナ川河口のノース・パシフィック・キャナリーへ、2006 年に戻ったことを振り返っている。65 年ぶりに妻と共に訪れたこの訪問は、彼の青春時代のサケ漁の季節に関する鮮明な記憶を呼び覚ました。彼は、両親の**タナカ・トミジロウ**と**タナカ・カズエ**が、白人の漁師がわずか数名しかいない、主に日系人と先住民で構成された刺し網漁船団の一員として、毎年 5 月下旬から 8 月にかけて缶詰工場で働いていたことを思い出している。かつて活気に満ちていたコミュニティは消え失せていたが、残されていた保存された木造建築物は、現在博物館として維持管理されている。館内には、日本人漁師や漁師の親方の名前が記された帳簿などが展示されており、当時の集落の面影を今に伝えている。

タナカ・ロイの回想の中心は、1930 年代初頭に漁師の親方となった父・**タナカ・トミジロウ**に焦点を当てている。英語に堪能で、漁船を所有する経験豊富な漁師であった父は、漁業への参入を望む和歌山県御所村の若い独身男性たち（しばしば「ボーイズ」と呼ばれた）を募集した。彼の責任には、漁船や免許、網の手配、そして缶詰工場からの前払金の確保が含まれていた。スティーブストンにあるノース・パシフィック・キャナリーとガルフ・オブ・ジョージア・キャナリーの両社の下請け業者として活動し、彼は両社にサケの安定供給を確保すると同時に、若い漁師たちの世話という負担を両社から取り除いた。その見返りとして、彼は多額の手数料を受け取っていた。また、彼は漁業免許を漁師の一人に貸し出すことで、追加の収入を得ていた可能性が高い。

タナカ・トミジロウの責任はサケ漁のシーズンを超えて広がっていた。彼はガリアノ島にあるコイデ・タケジロウのニシン塩漬けキャンプで簿記係として働き、1941年12月7日にキャンプが焼失するまでその職に就いていた。また、彼はキャンプで「少年たち」の冬の雇い先を手配し、彼らが収入を補うのを助けた。彼らとの関係は家族的で、彼を「トミニ（お兄さん）」と呼んでいた。しかし、この関係は1941年12月の強制移送と収容の開始で突然の終焉を迎えた。タナカ・トミジロウは1942年にグリーンウッドへ送られ、沿岸には二度と戻らなかった。代わりに彼は製材所で働き、その後はバンクーバーに移り住み、「トナリ・グミ」などで献身的なボランティアとして活動した。

タナカ・ロイはまた、夫に付き添って毎夏缶詰工場へ赴き、若い漁師たちの世話をするという、過酷でありながら往々にして見過ごされがちな母・タナカ・カズエの仕事についても語っている。母のような存在であり家政婦としての役割を果たす彼女は、肉体的に過酷で絶え間ない仕事をこなしていた。週末、男たちが漁から戻ると、彼女は和食を用意し、衣服の手洗い、縫製や修繕、そして海での日々に備えて弁当を用意した。彼女の最も重要な職務の一つは、毎週末に大きな木製の日本式浸かり風呂を用意することであった。平日は、男たちが漁に出ている間、宿舍の掃除をし、寝具の洗濯やアイロンがけを行い、さらに缶詰工場の生産ラインでも働き、実質的に週7日働いていた。

タナカ・カズエの働きは、ミズヤブ・フデ、シオジ・ウメ、ニシ・トク、マツバ・ツギ、ナカムラ・カメノ、ハマニシ・トキコといった、多くの女性たちにも見られた。シオジ夫人のように、冬季にはオーデのニシン漁キャンプでも働く者もいた。彼女たちの貢献は、男性たちの組織的なリーダーシップと女性たちの家事労働の両方に依存していた「フィッシング・ボス」制度の機能にとって極めて重要であった。

時が経つにつれ、漁師長たちの監督下にあった多くの若い漁師たちは独立するために必要な技術を習得し、自らの船や免許を手に入れた。1949年に戦時措置法が解除されると、一部の日系カナダ人漁師はスティーブストンに戻った。その後数年間、缶詰工場は戦前の漁業ボスに対し、カナダ全土の日系カナダ人コミュニティから「ハイライナー」と呼ばれる経験豊富な漁師を募集するよう促した。この募集活動は1949年から1951年まで続いた。

しかし、1980年代初頭までに、漁業経営者の役割は薄れていった。年配の漁師が引退し、自立した若い世代が業界に参入するにつれ、かつては新移民を支えていた体制は時代遅れとなった。タナカ・ロイは、この衰退が漁業経営者が業界と日系漁業コミュニティの両方を維持する上で極めて重要な役割を果たしていた時代の終焉を告げるものだったと指摘している。

2.3 カンノ・フミオ、「漁業への信頼」。2013 年 9 月 26 日および 11 月 7 日インタビュー

カンノ・フミオ（フランク）は、移住、家族の離散、そして海での長いキャリアによって形作られた人生を語る。1937 年に宮城県登米市の小さな町で生まれた彼は、農村で育ち、学校生活や釣りを楽しんでいた。漁師だった父親は経済的な理由でカナダに住んでいたが、カンノ・フミオと母親、そして弟は日本に残っていた。父親は金銭や物資を送って家族を支え、カンノ・フミオが父親に会えたのは移住する前の 2 回だけであった。1955 年 4 月、彼は家族と共に「ヒカワ丸」に乗り込み、バンクーバーへと船出した。カナダでの最初の 2 年間は、スティーブストンで父の友人であるタニ・セイキチの家に身を寄せながら過ごした。当初、カンノ・フミオは英語が全く分からなかったが、学ぶ決意を固めていた。彼は英語クラスや高校の夜間クラスに通い、家事を手伝う代わりに白人家庭に下宿するなどして、日常生活について会話できるほどの自信をつけた。

カンノ・フミオが初めて漁を体験したのは 1955 年 5 月、父に連れられてスキーナ地域へ行った時であった。父はポート・エドワードのネルソン・ブラザーズ缶詰工場で働いており、そこには 80 人から 100 人ほどの日系漁師が船を係留していた。シーズンが始まる前、缶詰工場では開幕パーティーが開かれていた。カンノ・フミオと父親はまずナッス川へ向かい、そこで彼は甲板員として働きながら、網を仕掛け、魚を仕分け、網の中に追い込む方法を学んだ。彼は網がプロペラに絡まるのを巧みに避けていたが、それは父の教えを注意深く守っていたおかげだと語っている。週末は休日であり、缶詰工場にある日本式風呂場は、漁師たちが漁獲量を語り合い、くつろぐ社交の場となっていた。カンノ・フミオはこうした週末に、ナカニシ・タメジロウやハヤシ・コウタロウをはじめとする多くの漁師たちと知り合った。

2 年目のシーズン、カンノ・フミオはナカムラ氏が所有するパッカー船で働き、弟のカンノ・エイジは父と共に漁に出た。1956 年のシーズン終了後、父は急逝した。カンノ・フミオは父の船を引き継ぎ、深く感謝しているタニ・セイキチの指導のもと、技術を身につけた。1958 年、彼は船をトラローリング仕様に改造し、バンクーバー島西海岸へ向かった。経験豊富な漁師のムラオ・トシオが開幕日に同行し、基本を教えてくれた。初期の経験で釣り糸が絡まる失敗もあったが、他の日系人トラローラーたちが助けてくれた。この経験は彼に、経験の浅い漁師を助けることの重要性を教えた。

カンノ・フミオの人生における最も劇的な出来事の一つは、1965 年、マエア・リイチ、ゴメス・ダリル、およびゴメス・フランクと共にハイダ・グワイでの漁から帰路についた際のことだった。ヘカテ海峡の途中、風が急激に強まり、4 隻の船すべてが危険な状態になった。カンノ・フミオは右舷のスタビライザーを失い、船は危険なほど傾いた。レーダーも GPS も持っていなかったが、日没

直前にボニラ島の灯台の明かりを捉え、安堵した。彼は後に、横断中に船が数回、転覆寸前であったと振り返っている。

カンノ・フミオは漁業における経済的な変化についても述べている。漁業免許の価格変動や、日本経済の動向に左右されるサケの価格などである。彼は持続可能性を実現するための協力を強調しつつ、商業漁師に負担を負わせている連邦政府の政策を批判している。

引退後、カンノ・フミオは宮城県友好会の活動に積極的に参加し、2011 年以降は会長を務めた。2006 年の「水安丸」航海 100 周年を記念して、ルル島に記念碑が建立された際、盛大な祝賀会が開かれた。自身のキャリアを振り返り、彼は受けた助けや引退生活を満喫できる健康に感謝の念を抱いている。彼は、現代の漁師が直面する課題を認識しつつも、自分が漁をしていた時代に漁ができたことを幸運だと感じている。

2.4 ハマダ・イツジ、「帰郷の旅」(2017 年インタビュー) およびタナカ・タカオ (1996 年収録)

タナカ・タカオとハマダ・イツジは、マニトバ州での 7 年間の抑留を経て、1949 年にスティーブストンへ戻った際の道のりを語っている。1949 年 4 月 1 日に制限が解除されることを知った時、タナカ・タカオはマニトバ州の農場を離れ、ウィニペグでハマダ・イツジと合流し、漁業への復帰を説得した。二人とも戦前は漁師であったが、マニトバでの収容生活は過酷で、賃金格差や劣悪な住環境など、肉体的・精神的な負担は甚大であった。

沿岸に戻れば差別に直面することは承知していたが、二人は 1949 年のシーズンに漁を再開する決意を固めていた。旅の途中、抑留されていた日系カナダ人が暮らしていたミントに立ち寄り、サカモト・ウノスケを訪ねた。ニューウェストミンスターで出会ったスズキ・バックは、彼らが組合に加入し免許を取得するのを手助けした。スティーブストン到着後、当初は缶詰工場から拒絶されたが、最後に訪れた J.H. トッド・アンド・サンズのボブ・ヘップルが彼らを歓迎し、船と網を提供した。彼は批判をものともせず、彼らを支援した。

漁期が始まる前日、彼らは約 20 人の白人漁師に遭遇し、人種差別的な罵声や脅しを受けた。タナカ・タカオとハマダ・イツジは決意を固めたまま、この出来事をスズキ・バックに報告した。スズキ・バックとホーマー・スティーブンスは敵対的な漁師たちに立ち向かい、二人が組合員であり、漁業を行う平等な権利を持つことを警告した。この介入により、彼らは漁を開始することができた。

彼らの成功は、他の日系カナダ人たちの帰還を促した。彼らはサカモト・ウノスケらに連絡を取り、その情報は瞬く間に広まった。日系カナダ人の帰還が増えるにつれ、組合は支援を続け、敵意

は徐々に収まっていった。1949 年 8 月下旬までに約 22 人の日本人漁師が戻った。**タナカ・タカオ**と**ハマダ・イツジ**は最初のシーズンでそれぞれ約 1,500 ドルを稼ぎ、その後も缶詰工場の支援を得て新しい船を建造した。

ハマダ・イツジは、自分たちが戦後スティーブストンで漁業を再開した最初の日系カナダ人であり、彼らの経験が地域社会復帰の重要な試金石となったと強調した。彼は、説得してくれた**タナカ・タカオ**、勇気ある支援をした**ボブ・ヘップル**、そして組合の**スズキ・バック**らに深い感謝を表した。一方で、政府に財産を没収され収容所に送り込まれた生活については、今もなお深い苦い思いを抱いていると語った。**タナカ・タカオ**も同様に、粘り強さによって生活を再建したと述べた。

2.5 キモト・イザベルとキモト・メアリー、「スプリング・コープでの新たな生活」、2012 年 8 月 28 日インタビュー

キモト・チズコ・イザベルと**キモト・メアリー**は、バンクーバー島西海岸における戦後の生活の再建について語っている。**キモト・イザベル**はスティーブストンとトフィーノでの幼少期を語り、その後家族と共に日本へ渡ったが、19 歳で再びカナダへ戻った。彼女はトフィーノの若い漁師**キモト・ボブ**と結婚し、1941 年に長女が生まれた。

真珠湾攻撃後、RCMP は日本人家庭から物品を没収し、**キモト・ボブ**は船の移動を命じられた。1942 年 3 月、**キモト・イザベル**と赤ん坊はヘイスティングス・パークへ送られ、馬小屋に収容された。母親たちは「忍」と「我慢」という忍耐の精神に頼って耐え抜いた。ボブは道路建設キャンプへ送られたが、後に家族はリルーエット近郊の自給自足型収容所ブリッジ・リバーへ移住した。

戦争が終わると、一家はハミルトンへ移り住んだが、1951 年に**キモト・ボブ**の兄**キモト・トム**の助けを借りて西海岸に戻った。一家はスプリング・コープの古い救護小屋に住み、電気も水道もない生活を送った。ウクルレットでの反応は様々だったが、先住民の住民たちは差別に対して理解を示し、支援してくれた。

キモト・トムは地域社会への溶け込みを促し、**キモト・イザベル**は PTA やボランティア活動に励んだ。1961 年頃にはパレードのために日本の山車を作り上げるなど、地域のイベントにも積極的に貢献した。

キモト・メアリーは、1951 年に到着した後の適応について語っている。彼女は地域団体に深く関わり、その多岐にわたるボランティア活動が評価され、2011 年には「年間最優秀市民賞」を受賞した。また、歴史協会はジョイ・コガワ氏を招いた地域全体のお祝い行事なども後援した。

スプリング・コーブでの生活は困難を極めたが、キモト・イザベルの大切な思い出の一つに、キモト・ボブが建てた杉製の「おふろ」がある。入浴は毎週の儀式となり、安らぎの源となった。

漁村コミュニティの社交のハイライトは、毎年恒例の「フィッシャーマンズ・ボール」であった。多くの参加者を集め、日本料理や伝統舞踊などで賑わった。

1950年代後半、ついに電気が引かれ、水道も整備されたことで日常生活は一変した。キモト・イザベルとキモト・メアリーはその後外で働くようになり、多くの家族が去った後もその地に残り続けた。彼女たちの思い出には、忍耐と貢献を通じて築き上げた帰属意識が含まれている。

2.6 ゴトウ・キヨオ、「70年にわたる思い出」。2012年9月20日インタビュー

ゴトウ・キヨオは、収容生活を経て1950年にサンベリーに戻ったことから始まる、70年にわたる漁師人生を振り返る。父の助けを借りてホリ・マサカズから最初のボートを購入した。翌年、父の評判の高さゆえにネルソン・ブラザーズから融資を受けてより良い船を手に入れた。彼は5年以内に船のローンを完済し、その後も数隻の船を所有して、ブリティッシュコロンビア州沿岸全域で漁を行った。

ゴトウ・キヨオは1950年代の印象深い漁場について語っている。潮の満ち引き、風向き、降雨量のすべてが漁の成否を左右した。当時、サンベリーの漁師たちは、堤防から妻たちに見えているため懸命に働いたという。彼はまた、1950年代初頭、カナダがサン・ファンでの刺し網漁を無制限に許可した特異な時期についても回想している。当時の漁業大臣ジェームズ・シンクレアは漁師に対し、通常の境界外での無制限の漁業を許可した。

1960年代の技術革新の中で、レーダーは最も重要であった。ナルカミ・テッドは原始的なレーダーを最初に設置した人物である。ゴトウ・キヨオはボートショーでデッカ101レーダーを見て注文し、刺し網漁師やトロール漁師として初めてこの装置を導入した。

ソナー、ロラン、オートパイロットなどの電子機器も漁業を一変させた。オートパイロットは追加の乗組員がいるようなものであったが、居眠りをして座礁した者もいた。ロランは正確な位置情報を提供した。ゴトウ・キヨオは刺し網とトロリングの両方が可能な複合船を用い、季節に応じて各地で漁を行った。

1970年代、ニシンの卵漁が盛んになった際、スズキ・ゴロとその甥のスズキ・ビーニーがかなりの量を獲ったことで関心が集まった。ゴトウ・キヨオはオイカワ・ジョージと組んで漁を行った。競争は熾烈を極め、漁師たちの間で緊張が高まった。

回顧録の中で、ゴトウ・キヨオは2012年現在も漁を続けていると記している。現代の規制により活動範囲は制限され、収入は経費を賄うのが精一杯であるが、サケが網にかかった時の高揚感は今も変わらないと語っている。

2.7 ナカガワ・カズオ、「12 日間の恐怖」、2009 年 10 月 26 日インタビュー

ナカガワ・カズオは、スキーナ川の漁業世界や、12 日間にわたる過酷な強制航海について振り返る。父は「キャプテン・ナカガワ」として知られるリーダーであった。母はフジモト家などの助けを借りながら家事に奔走していた。プリンス・ルパートには、ウエノ・トヨキチ、イソガイ氏、ヤマシタ家、そしてナカガワ・カズオ自身などの著名な船長たちが集まっていた。現地のコミュニティには、ヤマナカ家、シミズ家、キタガワ家、モチダ家、カン家といった家族経営の商店などがあった。

1940 年、ナカガワ・カズオはナカガワ・シズヨと結婚するため日本へ帰国し、1941 年に夫婦でスキーナ川に戻った。太平洋戦争勃発後、船舶を没収する命令が下り、彼は数日で帰れるだろうと予想して船に乗り込んだが、海軍は上陸を許可しなかった。仲間の漁師ヤマシタはわずかな食料を分け与えてくれた。26 隻の船は曳航され出港したが、ナカガワ・カズオは妊娠中の妻を残してきた自宅を目にし、カナダ政府の扱いに悲しみと怒りに打ちひしがれた。

航海は危険な海域を通過し、船が転覆したり沈没したりする惨事も起きた。マエダ・マサルマサハルの船は沈没したが、漁師たちは荒れ狂う海を航行しながら祈りを捧げた。クリスマスのアラート・ベイで過ごしたが、上陸は許されず、お粥と硬いパンを食べながら過ごした。

航海中、ナカガワ・カズオは政府から尊厳を認められず、協力しているにもかかわらずスパイ扱いされたことに深い怒りを感じていた。12 月 28 日、ようやくスティーズストーンに到着し、彼はプリンス・ルパートへと帰路についた。死を覚悟するほどの苦難の末、12 月 31 日に自宅に到着し、翌年 1 月に娘が無事誕生した。

その後、1942 年 3 月の強制移送により劣悪な環境で生活し、若い男性たちは東部へ送られた。ナカガワ・カズオはオンタリオ州で道路建設作業や農業に従事したが、賃金の低さや差別に直面した。彼は最終的にサンドン収容所にたどり着き、家族と再会した。物語は 1948 年の日本への強制送還へと続くが、文書は途中で終わっている。

2.8 ムラオ・トシオ、「嵐を乗り切る」、2012 年 2 月から 2013 年 12 月にかけてのインタビュー

ムラオ・トシオは、真珠湾攻撃直後の強制移送について語っている。当時スティーブストンに住んでいた彼は、カシヨウ兄弟からバッカーボートの移動を依頼された。到着すると場所はすでに兵士によって警備されており、彼はポート・アルバーニへ向かった。そこで兵士たちと地域連絡役のマエカワ・サイチロウ・ラリーが出迎えた。

漁師たちは一時的に家族と再会することを許されたが、劣悪な環境の船倉に収容された。海軍は突然出発時刻を変更し、食料を買う機会もなく暗闇の中を出発せざるを得なくなった。ムラオ・トシオは、運命が不透明であることから怒りと恐怖に駆られた。

船団は荒波に翻弄され、ムラオ・トシオの船は丸太に衝突して電線に火花が飛び散るなどの危険に遭遇した。この最中、アライ・ヨシオの船のエンジンが故障し、弟のアライ・シゲルが暗闇の中で救助を試みた。ムラオ・トシオは、司令官が彼らの安全を全く顧みていないと確信した。

航海中、漁師のオエ・コウタロウが不規則に漂流し、ニツイ・ヨシオが曳航していたボートと衝突した。オエは行方不明となった後、病院に搬送されたが数日後に死亡した。

船団はようやくスティーブストンに到着したが、ムラオ・トシオは疲労と空腹に押しつぶされそうになっていた。翌朝、船は押収された。彼は愛船を最後に係留する際、深い感慨に浸り、二度と漁をすることはないと悟った。

仕事を失ったムラオ・トシオは「二世強制移送反対グループ (NMEG)」に加わり、強制移送に抗議した。タナカ・フジイチやロバート・オカザキといった指導者たちが集会に参加した。抗議者たちは拘束され、不満は暴動へと発展した。弾丸や催涙ガスが放たれる中、彼らは数日間食事を与えられなかった。1942 年 5 月 16 日、収容者たちはペタワワ収容所へと移送され、新たな監禁の章が始まった。